常照
第875号

## 御正忌報恩講に思う
### ―聴聞する勤行―

御正忌とは親鸞聖人の祥月命日のことで、毎年十一月二十八日です。大谷派・三門徒派・木辺派・東本願寺派などの御本山では、旧暦によって毎年十一月二十一日から二十八日までの七昼夜、また本願寺派・高田派の御本山では新暦の一月九日から十六日までの七昼夜にわたり勤修されます。私たちのお寺の報恩講は、お取越し（お引き上げ）といって、御本山の御正忌に前もってお勤めし、本山報恩講に参詣するのが真宗門徒の慣わしです。これからの時節、各ご本山で御正忌報恩講が勤まります。是非お参り致しましょう。

報恩講は年に一度、親鸞聖人のご法事として勤まります。勤行は正信偈または文類偈・念仏・和讃を中心に、親鸞聖人が制作された著作が一座ごとに時間をかけて読誦されます。つまり親鸞聖人のお言葉を拝読することをもって、浄土真宗の教えを聴聞し、改めて真宗門徒として自身の信心を確かめるための御仏事です。

## 法要の軽重

法要には様々なものがあります。各家の月忌(月命日)、法事(年忌)、御葬儀。また各寺での修正会、春秋両彼岸会、盂蘭盆会などの年中行事。その中でも、とりわけ報恩講は最も格式の高い勤行で行われる重い法要です。法要の軽重と聞くと、軽い法要は手抜きをしているように思うかもしれませんが、そのようことではありません。軽い法要とは、特定の法要期間を設けず行われる平生のお勤めのことです。たとえば毎日晨朝(お朝事)を勤めます。私たちの日常は、仕事や育児や通院に追われる生活です。そのような中で一日の始めの勤行は、出世間の教え〈仏法〉を確認し、それを課題にその日を生きるための大事な法要です。このように、どの法要も親鸞聖人が出遇われた本願念仏の教法を聞信する大切な仏事です。

では報恩講を重く勤めるとはどういうことか。これは手間ひまをしっかりかけて報恩講をお迎えし勤めるということです。報恩講は準備から始まります。境内を清掃し、本堂内陣・外陣を隈なく掃除します。そして御本尊と親鸞聖人御影前に打敷を掛け、お華束(けそく)を盛り、各尊前に仏花を立て、荘厳(しょうごん)を整えて報恩講を迎えます。これが手間をかけるということです。ひまをかけるとは、時間をかけて勤行するというこ

とです。報恩講は初逮夜に始まり一昼夜（二日間にわたり逮夜（たいや）・晨朝（じんじょう）・日中（にっちゅう））乃至七昼夜で勤まります。各派によって異なりますが、大谷派では九通りの正信偈の勤め方（舌々（ぜぜ）・中読・真読・中拍子・草四句目下・行四句目下・真四句目下・句切・句淘）があります。正信偈は親鸞聖人の主著『教行信証』「行巻」末尾に記される六十行百二十句からなる七言古詩の偈文です。一般寺院の報恩講では逮夜に真四句目下（本山では句切・句淘）を用い、高い調子で力を込め、一句一息で読誦しながら親鸞聖人のお言葉を聞き味わいます。晨朝は真読を用い、一字一拍子七字目二拍子・二句一息程で、墨譜（ぼくふ）（節なし）でゆっくり静かに勤めます。日中は親鸞聖人が晩年に制作された文類偈を用いて勤まります。いずれも、しっかり声を出して教えの言葉を頂きながら勤めます。正信偈に続き念仏・和讃が勤まります。親鸞聖人が制作された和讃の総数は五百首以上といわれていますが、報恩講では『三帖和讃』の中から選ばれたものが用いられます。

和讃は南無阿弥陀仏の意（こころ）をわかり易くほめ讃えた和歌です。体裁は四句をもって一首となす七五調で、一句ごとにおおよそ上の句七字、下の句五字で整えられています。勤行での念仏・和讃の節は、二淘・三淘・五三淘・五淘・八淘・十淘・十二淘の七種類があり、

淘が多いほど節数が増え時間をかけて勤めます。一般寺院の報恩講では多くの場合、五淘で勤まります。淘（節）は上の句の最後の中淘や、下の句の最後の後淘など言葉の切れ間に付されます。これは淘を繰り返す間、その句の言葉をしっかりと確認し味わうためです。じっくりと勤め、しっかりと教えの言葉を聞く。これが法要を重く勤めるということでしょう。

## 勤行とは聞法

現代人は文章を読むとき、ほぼ黙読します。いま声を出して読む人はほとんどいないでしょう。しかし、ひと昔前までは背筋を伸ばし目の高さに本を構えて音読していました。同じ文章を繰り返し音読していると、頭で考えるより先に言葉が出るようになります。このようにしてむかしの人は教えを身につけてきました。つまり勤行を通して教え聞き身につけてきたのです。勤行は日常生活の中に仏法聴聞を実現するための形式です。そして報恩講は年に一度、時間をかけ、勤行で身についた教えと、自信の信心を確認する大切な法要です。

発行所
〒047-0017
小樽市若松一丁目四番十七号
本願寺小樽別院
電話（〇一三四）二二一―〇七四四番
FAX（〇一三四）二九―四〇八〇番
テレホン法話　二七―一六一六番